

こども若者自立支援地域フォーラム

～「ゆるやかな自信」を育む場をつくるために～

開催：平成23年4月16日(土)13時～16時 in クラシティ半田3Fホール

主催：こども若者自立支援地域フォーラム実行委員会

(エンド・ゴール、こころとまなびどっとこむ、地域福祉サポートちた)

後援：知多5市5町、半田市教育委員会、愛知県、愛知県教育委員会

参加者数：93人(教員・臨床心理士・音楽療法士・精神障害相談支援者・不登校支援者・引きこもり支援者・母子生活支援施設の指導員・子育て広場運営者・ママ企画運営の講座主宰・日中一時保育職員・介護NPO・県職員・親の会・当事者)

開会主旨

岡本 昨年施行された「子ども若者自立支援」の対象範囲は0～39歳。今回は、支援者の実践報告を通して解決の方向性を模索し、「私たち」にできることは何か、必要なことを話し合う機会。このテーマでのネットワークづくりをめざしている。今日の出会いを縁に、つながってほしい。

支援者によるトークセッション

大久保→小藤→岩田→水野→山本 (コーディネーター:原田)

大久保 自身もフリーターであった、当事者としての経験を活かし相談を始めたが、学齢期真面目だった人がフリーターになっていることに疑問を感じた。キャリアコンサルタントは、就労斡旋の対応をしているが、実際は、発達障害やうつ等の精神障害のため、社会や会社に適応できない人が多い。適応しやすい製造業や派遣業も昨今の不況により、その場さえなくなってしまった。社会全体として、個人の特性を活かす職場、産業、雇用を作りだすべき。個人の特性を探る中で、子どものころの育ってきたプロセスが関わっていると感じる。また特性によっては、専門機関への調整や人間関係の醸成が必要で、問題の多様性を感じる。これらは、就労を機に露見するため、サポートステーションでは、就労のあっせんに加え、相談のワンクッションが必要。

小藤 ジョブカードとは職務経歴書。仕事を通じて得た知識や経験、職務を記載するものであり、履歴書とは異なる。キャリアカウンセラーを通じて仕事に就くことを目的に始まった。雇用と若者をつなぐ支援であり、雇用側の教育訓練受け入れ体制や、ヘルパー2級資格取得を経て就職につながっていた。残念ながら、事業仕分けにより今年の3月末にジョブカードの制度は半田市では廃止。

終身雇用が良しとされ、定着が悪いのは働く側に責任があるとされてきた。企業は仕事にかかわる人を最小限にとどめ、人材育成に力を入れない。人が定着するが否かは受け入れ側の問題で、即戦力にならない人をいじめやパワハラなどで排除する動きがある。

特性に合わせてゆっくりキャリア形成の手伝いをする、寄り添いながら育てる職場側の意識が必要。

岩田 ころとまなびどっとこむは、心の在り方・存在・学びとは？をテーマに、小中高を対象に活動し2003年10月20日NPO法人認証を受けた。空手を通じて子ども育成に関わってきたが、彼らの心、涙の後ろにある「心」を支えるには何が必要か？が活動のきっかけになっている。

学童期の支援をしていて、幼児期の育て方によっては問題が変わってくる。親や先生の社会的通念では、成功と失敗が対になっているが、成功も失敗も努力の結果であって、一番いけないのは無感動・無行動。

横糸=子ども同士をつながり、縦糸=大人との関わり、斜め糸=地域が個性を認めたり、祭りなどに関わりつながりを作る。いろいろな糸が絡み合うことが社会で支えることになる。

水野 子どもと共に大人も育ちあうことを目的に活動を始めた。そもそも民生児童委員をしていた時に、当事者や先生からも不登校の相談を受けたことがきっかけ。不登校になる背景には、問題が複雑化していて、一人の力では解決できないと感じた。

また、バスケットを通じて子どもの育成をしていた時、他と関わる力・生きる力の低下を感じ、生きていくにはいろんな道があることを知ってほしいと思った。そのための体験活動が必要。

生身の人との関わりができないままにせず、寄り添って育んでいかなくては、日本の将来が危ぶまれる。

山本 成長の過程で、自分を知る時間が必要と感じる。例えば幼児期に、滑って転ぶ等体験を通じて心を育む。

子どもを授かり産んでから初めて「何をしたらいいのかわからない」親が多い。加えて、赤ちゃんは泣くものだがうるさがられ肩身の狭い子育てにストレスの負担が大きい。話を聞いてくれる人がそばにいればいい。一人で抱え込まないように、寄り添いながら支援を続けている。いろいろあっていい、そんな共生の大切さを実践から伝えたい。

グループディスカッション後の全体共有(グループ発表)

テーマ「私たちに何ができるか？」

1. 子どもにとって安心できる場をつくること。その姿はいろいろあっていい。大切なことは、自信の持てる場や自信を持てることを多く作ることが必要。
2. 支援団体へつなぐ機会づくり。
3. 発達障害に関して、学校との連携。
4. 親の居場所づくり。
5. 地域のみんなで、寄り添う心を持つこと。相談すること。
6. 子どもの自立を目指し、言い過ぎない。見放さない。寄り添う。
7. 抱いている不安を開放できる場や、人の存在をつくる。個を大切にできる場や人。それらの情報を得られる窓口をつくる。

詳細意見

教育関係者:

- 不登校生徒は、学校を卒業すると支援から離れ、ひきこもりにつながる。学校時代から地域の支援者につながり、切れることのないようにしたい。
- 地域のNPOの存在を知らない先生が多いので、伝えたい。
- 経済的な問題から学校を中退せざるを得ない学生が多い。その支援も必要。
- 自分で決め、決めたことに責任を取る経験を積ませる。

研究者:

- 相模原サポート支援センター立ち上げに関わった。支援者とは、実は何もしてあげることができない、ということを実感して子どもと共に一緒に考える存在である。

キャリアコンサル:

実施記録

- 転職や失業で自殺もある中、支える人を支える仕組みも必要。完全に自立している人などどこにもいない。みんな誰かに支えられている。中間的な支える仕組みが必要。

子ども若者の居場所に何が必要か？

- 仕事があること。本人の興味あること。
- プログラムは人により必要だったり、必要なかったり。
- いろんな人との出会い。
- 相談し易いところ。お寺。
- 話す場。(当事者)
- 行政主導の支援センターでは、ぶっちゃけた相談はできない。日常生活の何気ない話の中で寄り添いながら相談にのる。
- 人と人との関わりや生き様といった大人の姿を見せること。

めざす地域の姿

- 親同士のつながりで、親が楽しんでいる姿を子どもに見せることが大事。
- 地域で温かく見守る場を共有して、子どもも大人もお互いに気持ちを出せる場を作る。

論点



